



特集

次

世

代

■ 編集にあたって

岡本 真(アカデミック・リソース・ガイド(株))

本号の特集タイトルから、2012年の「電子書籍の未来」特集(Vol.53 No.12)を思い出した方もいらっしゃるだろう。事実、本号の「次世代ライブラリ」特集は、「電子書籍の未来」特集の後編的な位置づけとして企画された。

情報処理の分野で、図書館というと2012年の特集で紹介した国立国会図書館による大規模デジタル化がまず連想されるだろう。本会の元会長でもある長尾真氏が国立国会図書館長時代に提唱したこと

から長尾スキームに基づいて電子化された資料群は、ついに2014年1月から日本国内の公共図書館や大学図書館に向けて配信されるようになった。このようにすでに電子図書館というものは、半ば実現した状態にある。

そこで、本号の特集では、電子図書館のより先にある次世代の図書館のあり方を模索した。その結果が以降にお読みいただく、各記事とその書き手の顔ぶれの選択となっている。なお、各記事は大きく2つの傾向を持つと考えている。

吉本龍司による「カーリル—図書館のオープンデータ化を促す仕組み—」、地藏真作による「リブライズ—すべての本棚を図書館に変える仕組み—」、大久保ゆうによる「クラウドソーシングを先取りした青空文庫の軌跡—ボランティアによる電子ライブラリ活動—」は、すでに日本国内で取り生まれ、世



ラ イ ブ ラ リ

界的に見てもインパクトのある次世代図書館を志向する試みを伝えるものである。

そして、片岡真，香川朋子による「変わる大学図書館—九州大学附属図書館のシステムデザイン—」では，情報処理分野の研究者にとって最も馴染みが深いと思われる大学図書館のイノベーションの現在を，また金成隆一による「MOOCと大学教育のイノベーション」では大学そのものの変革を，小林巖生による「文化芸術デジタルアーカイブの活用とオープン化—次世代の文化機関像—」では図書館を含む多様な文化機関の将来を，それぞれ解き明かすものである。

図書館，あるいは電子図書館という言葉からは，デジタル化された資料を Web で閲覧できる仕組みといった連想が一般的だろう。特に会誌や論文誌を電子図書館として配信している本会の場合はお

さらそうだろう。しかし，本特集で紹介するように，次世代の図書館は「Web で読める」といった次元にとどまらない広く深い可能性を秘めている。また，実空間の図書館においても，人々の関心を大きく集め，年間来場者数が 100 万名を超える図書館が続々と登場し，さらには場としての図書館，知の広場としての図書館の可能性が訴えられ，大学図書館ではラーニングコモンズと呼ばれる協働学習空間の整備が進んでいる。このような社会の動静を 1 つの背景として頭に入れつつ，本特集の各記事をお読みいただくと，新たな研究・開発課題としての，次世代図書館の姿が目の前に広がってくるのではないだろうか。そう期待したい。

(2014 年 3 月 10 日)